

2023 年度 個人研究実績・成果報告書

2024 年 4 月 17 日

所属	学長付	職名	教授	氏 名	朱 全 安
研究課題	英国における東アジア学に関する総合的研究				
研究キーワード	英国 東アジア学	当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	17. パートナリーシップで目標を達成しよう	該当なし	該当なし	
1. 研究成果の概要 本研究の目的は、伝統的に東アジア学が盛んな英国における東アジア学の目的・方法・内容等の研究基盤を総合的に解明することである。 本年度は、現地調査に加え、文献資料・インターネット資料の調査・収集・分析を実施することにより研究成果を得た。さらに、英国の東アジア学に関する国際学会に参加し研究発表するとともに、現地研究者との意見交換と討論を通じて、英国における東アジア学の研究動向を把握した。また、専門分野である日本教育史・日本文化史の研究に、東アジア学の研究方法を取り入れ、新たな研究成果を得た。 2. 著書・論文・学会発表等 (できるだけご記入ください。査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載) 【著書・論文(査読なし)】 ・英米の大学による非政府部門からの資金獲得の取り組み、単著、朱全安、国府台経済研究、第 33 巻第 1 号、3 頁～22 頁、2024 年 3 月。 【学会発表等】 ・The Endurance of Chinese Studies from Early Modern to Modern Japan: The Case of Endō Ryūkichi 遠藤隆吉、朱全安、East Asian Interactions 学会、2024 年 2 月、オックスフォード大学。 3. 主な経費 英国における東アジア学の研究基盤について研究を進めるため、英国の東アジア学の研究拠点となっているオックスフォード大学への出張を行い、現地研究者との議論を通じて、英国の東アジア学の研究動向を把握し、英国の東アジア学に関する研究資料の調査を実施した。 4. その他の特筆すべき事項(表彰、研究資金の受入状況等) 【科学研究費】 ・基盤研究(C): 令和 2 年度～令和 6 年度、代表、課題名「江戸後期幕藩教育体制の確立にみる漢学教育の役割―廟学制の変容を軸として―」(20K02491) ・基盤研究(B): 令和 6 年度～令和 9 年度、代表、課題名「幕末維新期の藩校漢学教育に関する総合的研究―近世近代を繋ぐ漢学教養の持続性を軸に―」(24K00375)(交付決定)					

【大学・大学院教育への波及効果】

・本研究によって獲得される東アジア学の視点は、自らの文化についての情報を世界に向けて発信するという、現在、東アジア地域の人々に求められている能力の涵養に直接、役立つものであり、政策情報学部・博士課程政策研究科で担当する「東アジア地域研究Ⅰ・Ⅱ」「文化政策論」の講義とゼミナールを通じて、自らの文化を世界に対して客観的かつ理論的に伝えることのできる国際社会に開かれた人格の教育として結実している。